

研究代表者	所属学系・職名 社会・歴史系・准教授 氏 名 新藤 雄介
研究課題	昭和初期における学校教員の読書文化と社会運動に関する研究 Study on Reading Culture and Social Movement by Teacher in early Showa Period.
成果の概要	<p>【背景】 教員の労働組合を結成した人々による読書会や研究会では、カール・マルクス関連の著作が講読され、その思想が教育関係者のみならず、各種学校に通う学生へも広がっていくための重要な契機となっていた。</p> <p>【目的】 本研究では教員における読書文化と社会運動を通して、思想の社会的な普及を明らかにする。</p> <p>【方法】 『新興教育』（1930～32年）と福島大学が保存している「福島（県）師範学校関係資料」の調査と分析を行った。『新興教育』については①＝読書会・研究会の組織化、②＝大衆化に関する議論、「福島（県）師範学校関係資料」については③＝師範学校での実際の状況、に焦点を当てた。</p> <p>【成果】 ①『新興教育』は創刊当初から、読者の組織化と直接配布網による発禁対策を行っていた。こうしたことから、研究会そのものが読書の会であり、読書会そのものが文献を研究することであった。これらの研究会・読書会で、読書はあくまで組織化のための手段として位置づけられていた。 ②『新興教育』は、読者を獲得し運動を広げていくための大衆化に対応しつつも、一方で教員という知識人階層の知的欲求も満たす途を探らねばならなかった。つまり、読者からは、平易さ（大衆化）を求める声と、理論的深さを求める声とが、読者の中で混在していた。こうした中、編集部としての方針は、大衆化の方向に進んでいった。 ③『福島県師範学校学事年報』が明治36年～昭和16年までのものを確認することができた。昭和3年の「5 生徒訓育状況」で、具体的な内容の言及はないものの、師範学校生の中で思想問題が発生したことが記されていたことを確認できた。</p> <p>【主な出版物・発表】 新藤雄介, 2017, 「昭和初期の役人日記における読書と政治的志向——マルクス主義と共産主義運動との間の二重の分断線」 田中祐介編『日記文化から近代を問う——人々はいかに書き、書かされ、書き遺してきたか』笠間書院, 107-37. 新藤雄介, 2017, 「解説」和田敦彦・柿本真代・河内聡子・新藤雄介・田中祐介・中野綾子・西尾泰貴・森山祐子編『明治期書店文書——信州・高美書店の近代』（出版流通メディア資料集成（五）第一巻）金沢文圃閣, 397-9. 新藤雄介, 2017, 「憧憬されつつ遠ざけられるものとしての理論——1920年代における社会運動と理論の関係性」第11回史料データセッション研究会（学習院女子大学）2017年5月20日.</p>